

「十年ひと昔」と言う。今から10年前といえ、早春の3月11日、日本中を震撼させた東日本大震災が発生した。それに伴って、東京電力福島第一原子力発電所が爆発し、170キ以上離れた娘の嫁ぎ先まで放射線物質が降り注いだ。

娘の家には竹林があり、毎年春になると

大きなタケノコが大量に届いた。それを食するときの

何ともいえないシャキシャキ感がたまらなかつた。しかし、事故後はピタリと来なくなつた。竹林をはじめ畑も庭も放射線量が高く、孫たちが遊ぶ庭は土を全て入れ替えた。野菜は作っても食べられず、信州から四季折々に送り続けた。その後、だんだんと線量が下がり、今年はタケノコが届いた。

政府は福島第一原子力発電所から

日々出ている大量の汚染水を処理して海に放出することを決定した。その中には取り除くことができないトリチウムが含まれているという。海にはわれわれが食する海産物がたくさんあり、巡り巡って食卓のつてくるだろう。

廃炉にはまだ40年以上もかかるという。

## 10年目のタケノコ

その間、汚染水は出続ける。果たして安全なのか。風

評被害も心配だ。福井県では建設から40年以上たつ原発2基が再稼働することになった。本当に大丈夫なのか。これは次の世代まで続く国民的な問題である。

10年ぶりの新鮮なタケノコを食べながら、孫たちの顔が浮かんだ。どうか安全で安心できる世の中でありませうと願っている。

(安曇野市穂高、荻原義重、76歳)

点 差 口  
こうさてん